

男女共同参画推進企画室の活動 —女性の感性を生かした農学革新への道



阿部室長(左から2番目)と室員(一部)のみなさん。農学部3号館屋上にて。

科学と技術は研究の両輪です。が、もう1つ、表面には出にくいですが、大切なものがあります。アートです。これを支えるのは感性(センス)です。センスに富む研究には夢があります。女性研究者としての私の特別な憧れです。

東京大学では、文部科学省科学技術振興調整費事業「東大モデル“キャリア確立の10年”支援プラン」において、女性研究者を育成・支援するため、ポジティブ・アクションを定めました。その中で、大学院農学生命科学研究科は2010年における常勤研究者の女性比率の目標を15%に設定されています。

本研究科では、これまでに多数の女性研究者を社会へ輩出してきましたが、研究科内の現在の常勤女性教員は6%に過ぎません。しかしながら、近年、本研究科における学生の女性比率は30%以上に達し、しかも農学生命科学は、今後東京大学に進学するであろう女子高校生の注目をますます集めている科学です。

2006年に総長直轄の組織である「男女共同参画室」が開設され、2008年には本研究科にもその連携組織である「男女共同参画推進企

画室」が設置されました。「男女共同参画推進企画室」の主要なミッションは“優秀な女性研究者の育成と支援”です。2009年3月、東京大学は「男女共同参画加速のための宣言」を行い、女性研究者養成計画を学内において公募し、本研究科「男女共同参画推進企画室」において発案した「環境と食の研究に新風を—女性の感性を生かした農学革新」が公募対象の1つとして採択されました。これは①「食の安全と健康」、②「基礎とフィールドの調和」、③「科学と社会のかかわり」(順不同)を柱としており、①では、食品のケミカルバイオロジーの小林彰子准教授が2010年3月1日付けで着任予定です。彼女は、いま国を挙げて取り組んでいる“食育”(たべものを特に重視した子育て)に学術基盤を与えようと、大いに意欲を燃やしています。

今後②、③についても1名ずつの女性教員を迎え入れることとなります。彼女たちは豊かな知性の中に鋭い感性を加味し、女子学生の教育・研究には勿論、男子学生のそれにも新風を吹き込んで下さるでしょう。“女性のセンスを生かした夢のある農学生命科学の創出”に大きな期待を寄せているところです。

大学院農学生命科学研究科
男女共同参画推進企画室長
あべけいこ
阿部啓子 教授